各校ページ【立教小学校】

かつて、子ども、今、大人の私が、今の子どものために思うこと

立教小学校チャプレン　下原　太介

立教小学校の学校運営機構の中に、「生活指導部」という部署があります。この生活指導部が担う複数の役割の中に、首都圏近郊の様々な場所から通ってくる立教小学校の子どもたちの登下校に関わる働きを担う「下校指導」という役割があります。

この下校指導とは、子どもたちの登下校時の安心安全を守るために、登下校ルートの確認・点検・策定・改訂などを適宜行い、また、日々の登下校時に、定められた複数の通学路の各要所に立ち、実際に子どもたちを見守りつつ、迎え、そして、送るという、非常に大切な役割を担っています。

かつ、これらの役割と並び、下校指導において、常に心を割き、誠実に向き合い、行うべきものとして位置づけられている役割が、登下校時の子どもたちのマナーに関する教育です。

登下校時に自分自身の身の安全を守るための様々な交通ルールや心得を学ぶのと同時に、立教通りやその他の狭い歩道での往来の仕方、各駅構内の利用の仕方、電車内での態度・マナー、複数人で登下校する際に心掛けるべき集団行動の在り方など、自分以外の多くの方々の存在を常に心に留めた、登下校時の子どもたちのマナーに関する教育が日々、徹底されています。そして、それら一つひとつの内容と大切さを子どもたちはよく理解し、知識として身につけることが十分にできています。

しかし、時に、下校時、お友だちとの話に夢中になって、他の方々の往来に気づかず、通行の妨げになってしまったり、登校時、学校が楽しみで心と身体が躍り、駅構内で騒がしくしてしまったり、登下校時の電車内、その退屈さに耐え切れず、お友だちと吊り革にぶら下がってしまったり。

すると、翌日、立教小学校の子どもたちの確かなる安全と更なる成長、そして、立教小学校全体と社会全体のことを心に留めてくださる方から、ご指摘のお電話を頂くことがあります。立教小学校は、それら全てを感謝して、真摯に受け止め、子どもたちへの注意喚起を徹底したり、再発防止のため、その都度、登下校時のマナーに関するビデオや教材を制作し、子どもたちと共有したりしています。

その際、「立教小学生は紳士たれ」と語られたり、「立教小学校の制服を着ることに誇りと責任を持ってください。この制服を着たくても着ることのできなかった子どもたちも沢山いる中で、その制服を着ることのできている皆さんの、一つひとつの行動・言動は、とても重く、大切なものです」と語られたりします。

私は、このような言葉を耳にする度に、立教小学校、そして、立教学院の一員として、身につまされ、強い共感と共に、心の帯をもう一度、しっかりと締め直すことができます。

しかし、同時に、ご指摘を受けた子どもたちの姿と、彼らと大差ない自分自身の児童期の姿とが重なり、つい心の片隅で、こう思ってしまいます。「仕方がない部分もあるよなぁ。私を含め、全ての大人も、かつては子ども。友達とワイワイ、ガヤガヤと登下校する毎日、本当に楽しかったなぁ。でも、今、自分の目の前にいる子どもたちは…。児童期であるからこそ、過ごすべき、過ごせる特別な時間があり、児童期にしか存在しない“子ども”としてのかけがえのない特性が、時に、大人中心の社会の中で、大人の物差しで

“未熟”、“悪行”と受け止められ、大人の視点から一方的に変化・成長を求められ、自負や責任を背負わされる。子どもは、もっと子どもで良いのでは？そこに真の素晴らしさがあり、社会こそが、世界こそが、もっと子ども中心に変化・成長しなければならないのでは？」と。

（※決して、子どもたちの登下校時のマナーを放任してもいいということでも、“子ども”という存在は他者に迷惑をかけても許されるということでも、ご指摘のお電話自体に何らかの問題を感じるということでもありませんし、「立教小学生は紳士たれ」、「立教小学校の制服を着ることに誇りと責任を持つ」、これらの信念も素晴らしいものであると心から思います。）

もしかしたら、私たちは、子どもたちだけに変化や成長を一方的に求め、既存の社会や世界に子どもたちを都合よく成型することを、私たち自身は何の変化も成長もないままに、無意識のうちに“教育”であると勘違いしてしまっているのかもしれません。

飛躍している、非現実的、非教育的とご批判を受けるかもしれませんが、子どもたちと共に、私たち大人、社会、そして、世界そのものも変化・成長していくべきだとしたら、子どもたちが二列に並んで、楽しく会話をしながら歩くことのできない歩道があるのなら、他の方々の通行の妨げにならないように一列になって歩くことを指導し、促すのと同時に、広い歩道（特に、通学路）のある街創りを強く意識したり、立教小学校の子どもたちが立教通りではなく、立教大学構内を通学路として利用できるような環境創りを意識したりする必要があるのではないでしょうか（これも、一貫連携教育の重要な要素であるように思います）。登下校時、会話も笑顔もなく、ただ整然と、他の方々の通行の妨げにならないように列を成して流れる子どもたちの姿を想像した時、やはり、本当に必要なものは、他にあるのでは？と思えてしまうのです。

立教小学校の子どもたちのみならず、その他、実に様々な学校の多くの児童・生徒・学生たちが日々、利用する基幹駅構内には、なぜスクールゾーンやスクールルートがないのでしょうか？登校時、背が小さく、身体の小さな子どもたちが電車車両のラッシュアワーの中で窒息したり、体調を崩したりしないように、なぜ、子ども優先車両（安全面も考慮し、車両の一部を子ども優先スペースにするなど）は存在しないのでしょうか？

なぜ、社会が、世界が、大人が変わらないのでしょうか？子どもたちのことを何よりも中心に考え、自ら率先して、変わりゆく私たち大人の姿を子どもたちに示すことこそ、大切な教育なのではないでしょうか。

自らが愛することによって、相手から愛されるように。自らが赦すことによって、相手から赦されるように。自らが変わることによって、相手が変わるように。

「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」

（ルカによる福音書第９章48節、新共同訳）

2027年４月、そこに集う子どもたち一人ひとりが常に中心でいられる新校舎を、私たち立教小学校、立教学院に集う者たちがより一層、変化し、成長することで具現化できることを心から願っています。